

# まさか自分の街には... とは誰も言い切れない。

倒壊したビルの下敷きになり流血する人、落下した橋梁に激突した車、猛炎を噴き上げ炎上するビル...。近代都市サンフランシスコを襲った、突然の大地震は、多くの犠牲者を出す大惨事となりました。それは夕刻のラッシュ時の一瞬の出来事でした。私たちが生きていく上で欠かせない電気・ガス・水道・電話などのライフラインも寸断され、あの陽気で美しい街並みは、一瞬のうちに崩壊したのです。それは、決して“対岸の火事”ではありません。災害は忘れたころに突然やってきます。サンフランシスコの多くの人々も、自分たちの街にこれほどの大地震が来るとは、思わなかったに違いありません。もしがしたら、次は私たちの街かも知れないのです。この教訓は絶対に忘れることなく、いざという時に慌てないために、非常時の備えと心の備えをしておきましょう。そうした備えこそが、心のゆとりとなり、あなたとあなたの家族の命を救うのです。

# 備える。

準備。予備。整備。装備。守備。警備。  
 そなえる...用意する、そろえる、用心する  
 防備。常備。完備。不備。具備。兼備。  
 そなえ...したく、用意、警戒、防御  
 備品。設備。備蓄。備員。備考。備忘。  
 そなわる...準備ができる、身に付く  
 ●●●ソナエ アレバ ウレイナン!!



1989	SUN	MON	TUE	WED	THU	FRI	SAT
12	.	.	.	.	.	1	2
	3	4	5	6	7	8	9
	10	11	12	13	14	15	16
	17	18	19	20	21	22	23
	24/31	25	26	27	28	29	30

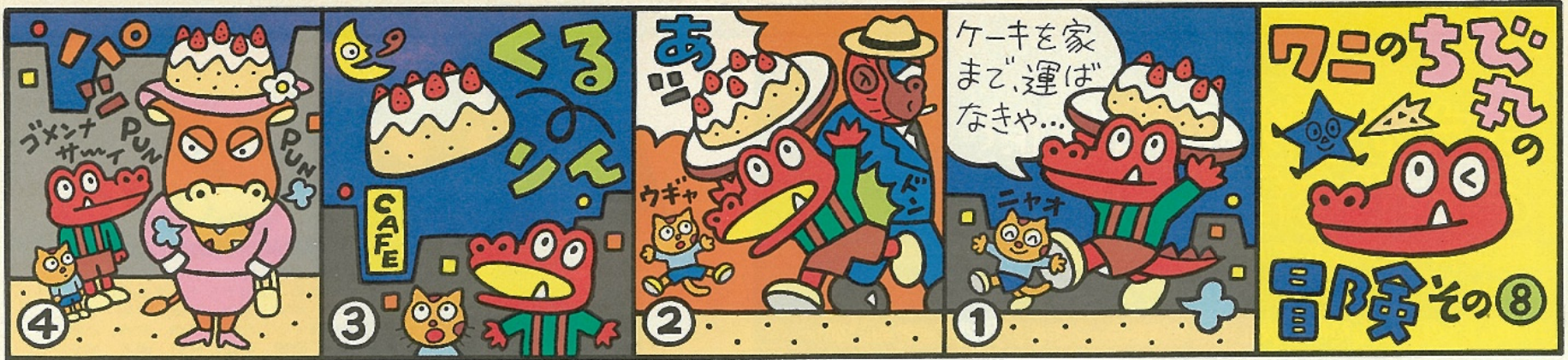
■毎月15日は川崎市民地震防災デーです。



かわさき NO  
防災広報紙

1989年(平成元年)11月30日発行  
 発行◎川崎市  
 編集◎土木局防災対策室  
 〒210川崎市川崎区宮本町1番地  
 TEL. (044)200-2111内線2841

# 64



これならできる、  
誰でもできる。  
もしものための日頃の

# 備える。



## 備蓄品・非常 持出品の準備

サンフランシスコ大地震のように、地震によるライフラインの停止は、組織的な応急活動が開始され、復旧するまでかなりの時間がかかります。その間、暗く寒い中、家族の安否を心配しながら何日も過さなければならぬかもしれませんが、ライフラインの停止した場合に備えて、備蓄品・非常持出品の準備をしておきましょう。

### ①食糧

家族の3日分を目安に、カンパン・ビスケット・缶詰など、そのまま食べられるものや、インスタントラーメン、赤ちゃんのいる家庭では、乳児用粉ミルクなどを用意しておきましょう。

### ②水

一人1日3リットル3日間を目安に、水筒やポリバケツに入れて保存し、定期的に入れかえをしましょう。

## 火の元の安全

地震で一番恐ろしいのは、火事です。日頃から、器具、プロパンガスの固定状態などを点検しておきましょう。

また、消火器は、火事を未然に防ぐのに大役に立ちます。使用方法をしっかりとマスターしておきましょう。

## わが家で一番安全な場所

地震が起きて、まず第一にすることは、自分の身を守ることです。わが家で一番安全な場所を家族で話し合っておきましょう。



## KAWASAKI Festival

「かわさき市民祭り」が11月3日から3日間、川崎区の富士見公園一帯を会場に開かれました。防災対策室でも市民の皆さんに防災意識を高めていただくために「防災コーナー」を設け、「わが家の安全対策」「家具の固定法」などパネルの展示、市が災害時に備蓄している乾パンの試食会、「消火マスター」という模擬装置を使って楽しみながらの消火訓練など各種の防災PRを行いました。



パパといっしょに消火訓練。うまく消せるかな。

## 液状化現象

今までなじみのなかったこの言葉は、今回のサンフランシスコ大地震で一躍注目をあびるようになりました。この液状化現象とは、地震の揺れで砂の地盤内部の水分が地表に噴き出す現象です。これにより地盤が液体のように容易に変化し、建物の土台を不等沈下させ、建物を倒壊させてしまうのです。日本でも昭和39年6月16日の新潟地震で、液状化現象により県営アパートなどの建物が倒壊したのが代表的な例です。今回の大地震でも埋め立て地区にあるマリナー地区で最も多くの建物被害が出ています。日本でも、首都圏を中心に臨海部の埋め立てが盛んであり、大地震が起きたときのこの液状化現象による被害は、相当なものに上ると予想されるため、非常に関心が高まっています。



## 7

## こちらお天気情報室

「月がカサをかぶると雨になる」「わた雲は晴れ」など、天気予報などなかった時代、人々は毎日の空の様子、雲の動きなどを見て天気を予想しましたが、我が国で天気予報が始まったのはいつ頃でしょうか。

明治16年(1883年)5月に外国の科学者の指導のもとに初めて天気図が作られ、翌年6月1日にいよいよ日本で最初の全国の天気予報が国家事業の一つとして始まりました。

しかし、当時は大きな気象災害を前もって防ぐための暴風警報が中心で、毎日の天気予報は発表されなかったのです。そのため、非難の声が上がり始め、ようやく全国の天気予報を天気図に書き入れて毎日発表するようになりました。現在とはだいぶ違って全国を数区に分け、1日3回発表されましたが、「午前6時全国一般、風の向きは定まりなし、天気は変わりやすい、ただし雨天がち」という大雑把なものだったのです。